

## 英国 United Kingdom

### ■TV番組「五輪と女性」を来春放映■

英国テレビのチャンネル・フォー局は「オリンピック大会と女性」というタイトルで、50分のドキュメンタリー番組を制作することになりました。ヨーロッパ、米国のテレビで放映されるほか、IOC（国際オリンピック委員会）の協力で、ビデオフィルムにコピーされ、世界中の各国オリンピック委員会と、各国国際スポーツ連盟に配布されます。

番組の主旨は「スポーツ界における女子選手のこれまでの業績を称え、また、今後の女性のスポーツ参加に何らかの影響を与え、女性スポーツの振興を押し進めること」（制作者）だそうです。内容は、オリンピック種目に限らず、広くスポーツと女性とのかわり方を考えるもので、大会記録フィルムや、選手、コーチ、各協会役員などのインタビューが盛り込まれることになっています。そこで、最も注目されるテーマは、今世紀に入って、スポーツウーマンたちがいかに男女差別と戦い、平等を勝ち取ったかということです。

舞台はヨーロッパ、及び米国とのこと。ビリー・ジーン・キング（プロテニス）や、エベリン・アシュフォード（陸上ロス五輪金メダリスト）らが出演するそうで、放映は来春です。

## 東ドイツ G.D.R.

### ■学生選手は文武両道こそ大切■

社会主義諸国にとって、スポーツは非常に有効なプロパガンダ（宣伝）の一つです。中でも東ドイツは優秀な選手を数多く送り出し、国家のイメージアップを図ってきました。

では、国家の後押しを受けている選手たちは一体、どのようにスポーツに取り組んでいるのでしょうか。フィギュアスケートのホープとして期待されている15歳のコンスタンツェ・ゲンゼル嬢（表紙の写真）の場合を見てみましょう。彼女は、4歳まで腰が悪く、補助員なしでは歩けませんでしたが。たまたま両親に連れられてアイススケートリンクに行き、すっかりスケート好きの女の子に变身。

今では腰の具合もすっかり良くなり、昨年サラエボ冬季五輪金メダリストのカタリナ・ビット（東ドイツ）の後継者として、専門家からも注目されています。現在、カール・マルクス・シュタットのスポーツ学校（優秀なスポーツ選手のための学校）10年生で「将来は医学の勉強をしたい」という希望を持っています。ビットと同じユタ・ミューラー女史のコーチを受けていますが、彼女の指導の最大のポイント、生徒たちがスケートの練習を理由に学業をおろそかにしないよう注意することだそうです。

## ソ連 U.S.S.R.

### ■女性スポーツは見た目が第一■

これまで、男性のスポーツとして考えられていた種目に女性が進出しているのは、世界的な傾向のようです。ソ連でも、柔道と水球の全ソ女子選手権が行われるようになりました。（ちなみに、日本では柔道が7年前、水球が昨年から女子全日本大会を開催しています）

しかし、これまで女性の参加など考えもつかなかった種目というので、男性側に大きな反発がありました。青年向けの新聞コムソルスカヤ・プラウダ紙上で、心理学者のセルゲイ・ニコロゴルスキー氏がこんな意見を述べています。「乗り物から降りる時、柔道をやっているような女性に手を貸してやるなんて、バカバカしいことだ」と。また、サンボ（ソ連の格闘技）の初代世界チャンピオンで、現在はコーチのダビド・ルドマン氏は「女子にとって、エアロビクス以上にきつい種目があるべきではない。女子柔道はスポーツ面での行き過ぎた女性解放だ」とまでいい切っています。一方、水球では男性側の反発は柔道ほどではなかったようで「女子選手のブレ」は、荒っぽい振る舞いやする賢い反則がほとんどない」と評価されています。この違いは一体どこから生じるのでしょうか。是非、男性諸氏の意見をうかがいたいものです。